

第2回サンティアゴ巡礼 (今回はログローニョまで) 【中】

(4月30日～5月2日)

4月30日 (日)

ロンセスバージェスのその宿舎を6:20に出発する。まだ日は昇っていないが歩けないほど暗いわけではない。早く出発する人たちは結構いた。

木立の中の美しい道を3kmほど歩くとバールがあることを知っていた。前回ここでカフェ・コン・レチェ (もうスペイン領なのでそのように言う。カフェオレのことである。) とクロワッサンで2・7€。あれ?二年前は2€だったのに。値上げをしたな。前はまだ疲れが残っていて大きなクロワッサン一個が食べきれなかったが今回はペロリである。これが七時ごろ。で、ここはもうブルゲーテの町の入り口であった。前はそういう風に認識していなかった。荷物を三分の一角に減らせたことの効果はとて大きい。

牧場の中を通る。馬たちがいる。親子連れでのんびりと草を食んでいる。その牧歌的すぎる道をたどり、エスピナル、メルキリツ、ビスカレッタなどの小さな村々を過ぎていく。



羊の群れ。稲作文化の国の人間はこのような風景に特にメルヘンチズムを感じる



日本では見たことのない色柄の馬たち



エスピナル村



国全体が童話的な雰囲気なんだよね・・・

途中で、昨日からどこかでちよくちよくすれ違っている韓国人の男性に声をかけられた。話をした感じでは二十代前半かな？というところ。

初めは英語。

「ぼくに見覚えがあるよね？」という感じで。

「どこから？」

「日本から。」

このへんまで英語で答えたと思うがそのあと二年間の学習の甲斐あってスラスラと韓国語が出てくる。

「一人で来たの？」

「うん、一人で来た。」

私が急に韓国語を喋りだしたものだから彼はちょっと驚く。

「サンティアゴまで行くの？」

「ううん、今回はログローニョまで。」

「荷物、重そうだね。どれだけあるの？」

「5 kgぐらいだよ。前は重すぎてちゃんと歩けなかったから頑張って減らした。」

「重いでしょ。」

と彼は後ろから私のザックを持ち上げて歩いてくれようとする。やめてくれ、うっとうしい。

「いいよ、いいよ、大丈夫だから。」

ようやく振りほどいた。やがて彼は私の先を歩いて行き、その後は会うことはなかった。



リンチョアイン村が見えてきた



この遊び場はよく覚えている



ここ、すごい急坂なのである

リンチョアインという村に至る。妙にこの村の名が印象に残っているのはここにとてつもない急坂があったからだ。まず見覚えのある子どもの遊び場（滑り台などがある）を過ぎると、あった！！傾斜三十度くらいあるんじゃないか？それが100mか200mくらい続き、山道に入っていく。

前回よりも歩くのが遅くないので他の巡礼者たちと前になったり後になったりして「ブエンカミーノ！」とか「オラ！」とか同じ人と何度も言葉を交わすことが多い。前回は抜かされたらそれっきりで同じ人にまた出会うことは殆どなかった。

「どこから来たのか？」とはよく聞かれる。アジア系は珍しいのである。アジア系で多いのは韓国で、他の国からというのはもっと珍しい。韓国の次に多いのが日本だろうか？次は中国かな。しかし中国人は殆ど見ない。一日に一人出会うかどうかである。そのほかのアジア人は全く見たことがない。

たまに名前を聞かれる。向こうも名乗る。でもあまり詳しい話まではしない。そんなに喋っている時間もない。私は思った。カミーノの世界はファーストネームとナショナルリティだけで人間関係が成り立っているな、と。日本のミチユ、オーストラリアのジェイン、というふうに。たとえアルベルゲで一緒になって話をする時間があって言葉の壁がなかったとし

でも、人々は自分がどういう旅をしているか、普段どういうことをしているか、最近どうい
うことがあったかというような話をしている様子はあるが、夫がどういう職業であるとか
自分の子供がどういうふうであるなどのプライベートなことを詳しく話している様子はない
なと感じた。

日本人は普通初対面の人に自己紹介をするとき下の名前も言うかもしれないが、必ず姓
も言う。韓国人や中国人はたいていフルネームで言うだろう。しかし欧米人はまずファース
トネームだ。少なくともカミーノ同士の間では姓まで名乗るのは「今後も連絡を取り合いま
しょう」と言う時だけではなかろうか。私はその日の道すがらオーストラリアから来たジェ
インという女性と名乗り合ったが彼女とは二度会っただけだった。つまり少しの間だけ同
じくらいの速さで歩いていたということであるが、その後は彼女の方がずっと先に行って
しまったらしく、もう会うことはなかった。

エーロ峠より少し手前の道端に小さな慰霊碑がある。「2002年8月、日本人の巡礼者
ヤマシタシノゴ氏（64歳）がここで亡くなった。」と書いてある。この碑は前回は確認し
たし、ネットで見る他のカミーノ体験者の方々のブログにもよく紹介されている。しかし今
回ちょっとガッカリしたのはその碑の様子が変わっていたことだ。以前のは木で十字
架が立てられていてその周囲を木の枝や花などでデコレイトした素朴で詩的なものであっ
たのだが今回はパネル（これは以前にもあったかもしれない）が立てられていてその足元が
コンクリートで固められその上に荷物を置いて休んでいる人がいた。コラッ！失礼だろう、
と言いたい気分になった。



2002年にここで亡くなったという日本人、ヤマシタ氏の慰霊碑



ここはエーロ峠

エーロ峠に12:20に着き十分ほど滞在する。移動販売の車がいて前回と同じくオレンジジュース（スモデナランハという）を買って飲む。2€。そして前回はこの後がバテバテで小刻みに何度休憩したかわからなかったが今回は頑張って歩くことができ13:40にスピーリの村に着いた。（村といっても建物が日本人の目にはロマンティックでお洒落に見えてしまうので町のように感じてしまうのだが）前は17:00だった。朝の出発は同じロンセスバージェスを7:00で。



スピーリの村の入り口

ここで泊まる人が多いようだが私はここでは前回倉庫のような場所のコンクリートの床に寝ることを余儀なくされたという嫌な思い出があるのでスルーして次のララソアーニャまで行く。でも疲れていたの村の入り口近くにあったベンチで二十分ほど休憩する。カロリーメイト二本と薄めたオレンジジュース（さっきエーロ峠で買ったジュースの残りを持ちの水と混ぜた）でエネルギーを補給。話はしなかったが同じベンチにもう一人男性が座

っていた。地元の猫が一匹、私たちの周囲をウロウロしておこぼれを狙っていた。

さてスビーリからララソアーニャまでの道は南側（左手）の山沿いにつけられた道に行く。（右手には川があり、スビーリの村はその川にかかる橋を渡った向こう側にあるのだが私は今回その橋は渡らなかった。）右手に川がある川の向こう側、つまりスビーリの村の先はマグネシウム工場で、かなりの間それに関係した敷地らしい土地を見下ろしながら歩く。



小川にかかる可愛らしい橋



あそこがララソアーニャ？ ではなかった。

細い可愛らしい山道がそのうち車道に入る。まあ情緒的な雰囲気は失われるが安心感が増す。その車道沿いの右側に良さそうなアルベルゲがあるのを見つけて訪ねてみる。是非ともララソアーニャまで行きたいわけではなくてスビーリより少しでも先まで進んでおけばいいや、というくらいの感じだったからここで宿にありつけばそれにこしたことはない。しかし残念ながらそこは予約なしではダメだとのことであった。申し訳なさそうに言うオスピタレイラ（女主人、または世話人）の女性と別れてさらに進む。

そのうち右斜め前方に村らしき物が見え、「あそこがララソアーニャか？」と思ったがそうではなかった。スビーリからララソアーニャまでは3～4kmのような気がしていたがけっこう長かった。あとで確認してみると5.4kmということだった。

15:00過ぎにララソアーニャの村に入る。村、とはいってもフランスやスペインの町や村はたとえ人口が少なく交通が不便で商店もろくにないような場所であっても日本人（特に年のいった人間）の目から見ると建物は童話の世界のように美しいし、人々の雰囲気に泥臭さがなくて都会の人と変わらないように見えるし都会の人でも日本人のようにお洒落に熱心というほどではないし商業主義にまみれた生活はしていないから田舎の人と都会の人の雰囲気の違いがほとんど見えない。村には必ず教会の一つや二つはあり、役場の建物も童話的で美しいし、小規模でも小学校はあるし日本の限界集落のように老人ばかりということはない。だから村、などと言うては申し訳ないような気がする、というのはむしろ村に対して失礼なことであろう。

この村もまた小さい川にかかる橋を渡って入る。するとすぐ正面にバールのような、ひょっとしたら宿泊施設もついているのではないかと思うような建物があった。入ってみて「ここはアルベルゲか？」と尋ねると店の人が「アルベルゲはあっちにある」と指し示して教えてくれた。

そして行って見たアルベルゲは建物はそれなりの大きさと、談話室があつたりして一見設備が良さそうに見えた。宿泊料は6€だったので安いな、と思った。しかも案内された部屋は二段ベッドが二つ。四人部屋なのに6€とは奇跡だ！普通は12～15€するぞ、と思ったが、しかし良かったのは部屋が狭苦しくないこととゆったりした見かけだけだった。あとは何もいいことがなかった。シャワールームはトイレの中に一個だけ。超狭くて脱いだ物や着替えを置く場所はない。まあ普通アルベルゲのシャワーはどこでもそんな感じで、上の方に掛け釘が一つか二つあるだけでそこにビニール袋に入れた荷物をぶら下げておくことになっているのだが、シャワーの囲いの壁がシースルーなので誰かがシャワーを使っていると他の人はトイレの使用を遠慮しなくてはならない。お湯も出なかった。ぬるいとかじゃなくて完璧に水だった。その水を一応浴びて出た。

しかしこれでは洗濯もできない。洗濯機はないにしてもせめてお湯が出れば洗いやしうし乾きやすい気がするが、水で洗って手で絞って乾くだろうか？外は寒い。干す場所もない。部屋の窓を開けてそこに服を干している人がいたが暫くして私はあまりに寒いので窓を閉めた。誰かの洗濯物はハンガーに掛かっていたので窓の外側に干した。

他の部屋からある男性がシャワーを使いに行くところを見た。パンツ一丁の姿である。なるほど……。しかし私にはマネはできない。二年前にあるアルベルゲでシャワーを浴びた後の男性がパンツ一丁でうろついているのを見てよく寒くないかと驚いたことがあったがそういうわけであったか。尤も欧米人は寒さにも強いようである。

年齢不詳の小さな日本人は目立つのでけっこう周囲が気を使って親切にしてくれる。隣の部屋の女性から「こっちの部屋にしたら？こっちの方が窓がきちんと閉まるから寒くないよ。」と勧められた。私は気づかなかったが私のいる部屋の窓の扉は建付けが悪いようだった。しかし勧められたベッドは上段だったので昇り降りが容易ではない私は辞退した。

全く年をとると二段ベッドの昇り降りは楽ではない。しかも日本で見ると二段ベッドとは違ってアルベルゲの二段ベッドは梯子が簡単だったり手すりが無かったりあってもグラついていたりでまことに危険である。下手をすると梯子さえついていなかったりする。前の晩ロンセスバージェスの巨大なアルベルゲで私は幸いにも下段を使わせてもらえたがその二段ベッドには梯子がなかった。しかし欧米人の皆様はその長い手足を駆使してやすやすと昇り降りをしていた。しかし二年前の時には私はそこで二段ではないベッドに寝たのだがあそこは巨大な施設なのでいろいろな部屋やベッドがあるらしい。

そではさておきその日のアルベルゲ、「私はここには泊まらない」といって出ていった女性がいた。宿替えをするらしい。そうか、彼女にとってもあまり快適ではないのだな。でも私はいいや、寒いし不便だけど別のところを探そうなんて面倒くさい。で、外に食事に出かける（それだけが楽しみ）時間までベッドに潜り込んで身体を休めていた。といっても布団も毛布もないのでシュラフカバーやオーバーズボンやレインコート総動員してのことである。そして夜七時（まだ明るい）になって先ほどのバーに食事をしに行く。寒いのでレインコートまで重ねて着こんで行った。

同じアルベルゲに泊っている人たちと同じテーブルに。スープかサラダかパスタ、の前菜から私はスープを選び、ビーフシチューかペスカード（魚料理一般のこと）のメインディッシュから私はペスカードを選び、りんご（見ると丸ごとでナイフ付きだった）かヨーグルトかアイスクリーム、のデザートからはアイスクリームを選んだ。ワインは飲むと眠くなってしまうのでやめておこうかとも思ったが折角なので一口だけ飲んでみた。が、これが間違いの第一歩であった。

まずスープが来た。ニンニク入りのトマトスープである。これはまあよかった。冷え切った体が温まった。ところで食事が始まる前に私は「写真を撮ってもいい？」と尋ねてテーブルを囲む人々の写真を撮らせてもらい、自分を含めた写真も写してもらった。私の左隣りに座ったシルバーヘアと感じるくらいに明るい金髪の女性、多分四十歳ぐらい、はサンフランシスコから来たデボラという人であった。他は男性が多かった。少し離れたところにもう一人くらい女性がいた。しかし彼らの名前は聞いていない。



これじゃあ何のために写させていただいたのかわかりませんね。美女、イケメンが台無し・・・



そういうわけでこのようにご紹介

私の右隣に座った男性が今までの旅の写真をスマホで見せてくれた。その中にブータンの写真の一群があって私は驚いた。そして「私もブータンに行った。四回も行った。」と言うと彼は「美しい国だよ。でもお金がかかるよ」と言った。そうそう、と私は言った。ブータン旅行では一日の滞在あたりいくら払わねばならないという決まりがあるので節約の仕様が無いのだ。でも私は「ガイド、運転手付きで高級ホテル泊まりで道中迷う心配もなく安全で快適な旅ができるのでそれもよし」と割り切っているのだがサバイバルな旅に慣れている人から見ると残念なところかもしれない。

さてスープの次にメインディッシュがやってきた。美味しそうな魚料理である。例によって多すぎる感じはするが食べきれなかったら残せばよい。もし可能ならテイクアウト、と私はちゃんとタッパーも用意してあった。ところが予想外のことが起こった。白身の魚と野菜のクリーム煮のようなその料理を、一口含んだとたんに私は固まってしまった。塩辛い！あまりにも塩辛いのだ。例えて言えば辛口の塩鮭を白飯なしで大量に食べなくてはならないような、干し鱈の塩抜きをせずにそのまま料理に使ったような……。その最初の一口さえ水と一緒にモグモグしてみても私はとうとう呑み込めなかった。それでこっそり口から出して捨てた。一緒に入っている野菜の塩分はそこまでではなかったが最初の一口で私の胃袋はショックを受けてガシャッとシャッターを下ろしてしまった感じで私はそれさえ食べられなくなってしまった。

「塩辛過ぎる！」と私が言うと「そう？」と右隣の男性。「しょっぱいものはダメなの？」いや、普通のレベルじゃないって！しかしその男性もペスカードだったが彼は全く平気で料理をぺろりと平らげる。え～、あなたはどんな味覚をしているの？

お陰でその夜のディナーはさんざん。一口だけ飲んだワインが悪酔いの素となった。気分が悪くなってきて私は一刻も早くベッドに戻りたかった。「胃が疲れたらしく具合が悪くなった」と言い訳をしながら私は大方の人々がメインを食べ終わるまで耐えた。そしてデザートに出てきたアイスクリームは日本でも普通にあるサイズの、バニラの上にチョコのかかったアイスバーで味も日本のものよりいくらか甘みが強いかなという程度でいつもなら簡単に食べられるものだったが一口齧ってみたけれど胃袋が「ムリ！」と叫んだ。

それで私はコップ型の蓋つきタッパーにそのアイスバーを入れて持ち帰ることにした。カップが小さくて蓋は閉められなかったが、他の人々は当然まだ宴もたけなわでお喋りの弾んでいる最中であつたが私は体調がすぐれないということにしてお先に失礼した。体調が悪くなった原因は塩辛すぎる魚よりも一口だけ飲んだワインのせいであると思われた。私は家でゆったりしている時にワインを100CC程度飲むのは問題ないのだが周囲に気を使わなければならない状況で飲むのはやはり危険だったのだ。二年前にも別のアルベルゲでディナー中に似たようなことがあったのである。

さて店から出て相当に冷えてきた戸外を歩いて数十メートルのところにあるアルベルゲのベッドに戻った私であつたが十分後には気分はほぼ元通りになりアイスもまだほとんど溶けていなくて問題なく食べることができた。やっぱり私は一人の方が落ち着くようだ。私がカミーノに出かけてくるのはさっきのようにいろいろな国の人たちと自然に交流できるのが楽しくてということもあるのだが、私にとってはそれはやはり体力と精神力を相当に要することなのである。

その晩私は何度もトイレに通った。お腹を壊したのではない。寒かったせいである。同室の人たちにとっては煩かったのではないかと思うが私自身はそれでも全く眠れなかったわけではなかった。食事に出かけた時以外は殆どベッドに潜り込んでいたわけなので身体はけっこう休まった。しかし夜の十時過ぎ、外で子供の激しい泣き声が三十分くらい続いて気

になった。こんな時間に何なんだ？ 駄々をこねているのか何なのか？ 折檻されているのではあるまいな？・・・などと考えていたがそのうちに収まったようであった。

5月1日（火）

ララソアーニャのアルベルゲを6：40に出発する。朝食を食べに（自前の食糧を口に入れるに、ということである。）階下の談話室に行った時に気が付いたが、シャワーのもう少し良さそうなのがそちらにも一つあった。それから飲み物の自販機もちゃんと作動しているようだった。昨日ホットドリンクが飲みたいと思い、目に付いた自販機にトライしてみたのだが扱い方がわからなくて壊れているのだと考えることにしたのであった。ちょっと誰かをつかまえて使い方を尋ねてみればよかったのだろうがそういう勇気を出せる時と出せないときがある。理由は特にない。その時の気分としかいいようがない。

さてまだ薄暗いうちの出立であったが順調に歩行する。次の村、スリアインに八時ごろ着く。村の入り口の橋のたもとに良い感じのバルがあった。トイレも借りたかったので朝食をとりに入る。ちなみに出発前にアルベルゲで食べてきたのはクラッカーを二、三枚。私はいつもそうなのだが目覚めて間もなく消化の良いものを少しだけ口に入れる。そうしないと気分が悪くなるのである。が、本格的な朝食はその一、二時間後である。そのくらいにならないと胃が元気に活動してくれないのである。



朝で光が少なくてはっきりしなくてすみません。このバルの中で食事をしました。

店のカウンターの上に置かれたケースの中にトルティージャが四種並んでいた。トルティージャというのはスペイン風オムレツ、もう私にはすっかり馴染みのものである。そしてどうせならまだ食べたことのないものかと思ひ、何だかわからないが黒っぽい具の入ったトルティージャを一切れとカフェ・コン・レチェを頼んだ。スペインでもブータンでもそうなのだがコーヒーや紅茶などどこでもカップから溢れそうなほどなみなみと淹れてくれる。

実際運びながら溢れてしまうことがよくある。そのために受け皿があるのだ、と言われるかもしれない。だから一杯のカフェ・コン・レチェと言えども結構量がある。私は胃があまり強くないらしいのでミルクがたっぷり入っていたとしてもカフェインが負担になることがある。だから内心「大丈夫かな？ジュースにしておいたほうがよかったかな？」とも思った。でも半分くらいは問題なく飲めた。

しかし後半、胃から「ストップ！」の声がかかった。そうなるともう一口も飲めなくなる。食事の時でも同じ。私の胃はもう限度と判断するとストップをかけ、シャッターを下ろすのごとくそれ以上の飲食物の流入を拒否する。それで私は半分カップに残ったコーヒーをタッパーに移しあとでまた飲むことにする。トルティージャも大きいので（日本で売っているカットしたチーズケーキの二倍くらいの大きさ）半分タッパーに入れる。

九時ごろイローツの村を通過。しかし次のサバルディカのあたりで「何だ、これは？」と思うような山道に直面する。「え〜、もうすぐ大都会のパンプローナだろ。何でこんな？」前回私はスピーリからパンプローナまでバスに乗ってしまったので巡礼道の方を見ていないのである。まことにカミーノの道は日本ではありえないものに溢れている。

さてパンプローナは広い大きな街である。市街地は10kmくらい続くので中心部はまだか、街を抜けるのはまだかとイライラする人も多らしい。さっきの山道はどうやら終わり、そのうちヴィジャーバというところの橋のたもとに着く。そこで10:40から11:00まで休憩する。そしてさきほどテイクアウトした食料で軽食をとる。そして橋を渡るとそのところに教会のようなものがあって「どうぞスタンプを押して行って下さい」と案内が出ていたが私は面倒くさいのでパスしてしまった。クレデンシャルもザックの蓋を開けないと出てこないのである。すぐに出し入れできる場所に入れておけばいいことなのだがそういうところに入れておくと落としたり汚したりしそうで怖い。

そして間もなくパンプローナの街に入る。美しい街だ。歩くのが楽しいし退屈しない。石畳の道なので足への負担がかかるという人もいるがさほど気にならない。今回荷物が小さくて上半身への負担が少ない分、私は足が全ての負担を引き受けている感じになって足が痛くなることが時々あるがこれは理論的に変だという気もする。きっと精神的な条件で足の痛みが強くなったり弱くなったりするのだろう。パンプローナの街を私は十一時から十三時三十分までかかって通り抜けたが足はそんなに辛くなかった。

そのうち街を抜け郊外に出る。次はシズール・メノールだ。この辺の道は前回歩いた時のことが鮮やかに思い出される美しい地区だが私は地名を意識していなかった。前回パンプローナ中心部のホテルに泊まって、まだ歩き出したばかりだったからであろう。そしてここからはるか前方にはペルドン峠（正確にはその峠に連なる山並み）の風車の群れが見えていた。

このペルドン峠はわりと近くにあるように見えるのだが実はこのあたりから10kmもある。私はこの日、このペルドン峠を越えてその次の村のウテルガまで行こうと考えていたがこのあたりから「無理だな」と思い始めた。まだ十何キロもあるという実感はないのだが何

となく午後遅くなってから山を越えるのはしんどいな、泊まる場所にありつけなくなるかもしれないと思い始めた。それで私はあっさりとその日の目的地をシズール・メノールに変更した。

庭に花咲き乱れる美しいアルベルゲに入る。12€取るだけあってシャワーも洗濯機も乾燥機も物干し場もキッチンも談話室も揃ったなかなかいいアルベルゲであったが、洗濯機も乾燥機も二つずつあるだけ良いとはいえ客の数はかなり多いので使うのが難しく、手洗いすることにした。物干し場は広いのだが下着を干すのには難ありで、やはりベッドの枠に干すことにする。洗濯ばさみを持って来なかったので靴下を干すのも心配だ。それでこれもベッドまわりに。

ここでちょっと洗濯のことについて書かせてもらう。旅の途中の洗濯はなかなかままならない。しかし持参の衣類の数には限りがあるから汚れる度に好きなだけ取り換えるというわけにはいかない。ことに私は今回は荷物の軽量化を強行したために、着て歩く衣類以外に持参したのはペラペラの化繊の半袖シャツ二枚、同じくペラペラのスキニーパンツ二枚（女性はわりとみんなそういうのを履いていた。）後は下着二組、靴下二足のみ。タオルだって勿論バスタオルなどもっての外である。だからフェイスタオル二枚とハンカチ二枚だけ。これで十日間使いまわした。機内で出た不織布のおしぼりも捨てずに利用した。

個室が使えてシャワーもついているホテルに泊まった場合は洗濯の問題はない。お湯も出るので汚れたものはチャッチャと手洗いし、よく絞ったあと備え付けの大きなバスタオルでぐるぐる巻いて足で青竹踏みよろしく踏みつけスピン完了状態にする。そしてタオルともども乾きそうな場所に広げて干す。これで大抵朝までに乾く。ほんのちょっと湿気が残る場合があるが、着ても全く問題ない。

しかし問題はアルベルゲに泊った時である。アルベルゲには洗濯機や乾燥機を備えてあるところもよくあるがしかし泊り客十人に対して一台あればいい方でしかも洗濯も乾燥も終了までになぜかとても時間がかかる。だから殆ど使えないのだ。前に使っている人が一人だったとしても空くまでそばでずっと待機していないと別の人に取りられてしまう。動けないのは辛いから結局諦めて手洗いする。

そして風通しの良い干場があることもあるが男女ごちゃまぜで泊まっているので下着などはどうも干しにくい。洗濯ばさみを持っていけばよかったのだがそれがないと靴下などは風で飛んで行きそうなのでついついベッドの柵などに干すことになる。（ところで欧米人の女性は人目のある所にパンツを干しても割と平気なようである。もう開き直っているのか？）そうすると靴下なんかもう絶対に乾かない。

身にまとう物についてはシャワーを浴びた後用には汚れていないものをキープしておいて、外を歩く時には洗っていないものを翌日そのまま着るのを我慢しよう。しかし靴下だけはそうはいかない。これはパンツよりも重要なのである。パンツが汚れるのはトイレトペーパーを使って防ぐことができるが靴下はそれができない。靴下様をないがしろにすると途端に足に報いが来る。どんな雑菌にたかられるかわかったものではない。そのせいで歩

けなくでもなったらそれこそ命とりである。

しかし靴下を乾かすのには苦勞した。一部屋に十人も二十人も寝ているようなところだと気温はそう下がらずにすんでも多分湿気が飛びにくいのだろうと思う。一晩干しても乾かなかった靴下を翌日ビニール袋に入れて持ち歩き、次の宿に着いてまた乾かす。それでも靴下様は頑として乾かない。そしてとうとう替えがなくなる。三足全部濡れていて朝履くものがない状態……。私は必死で乾かした。一番前に洗ったものを手に嵌めて寝てみた。しかしこれはあまり効果がなかった。それに寝ている時に手を冷やすのはあまり快適ではないとわかった。それで思いついたのはそれらを顔の上に載せて寝ることだった。熱を冷ますために額に載せる絞ったタオルというのはそんなに高熱ではなくてもすぐに乾くではないか……。

これは一番効果があった。三時間後には私の顔の上の靴下様はなんとか履けるまでに乾いた。そして残りの湿気は私の足が発する熱とキャラバンシューズの呼吸機能が吸い取ってくれて、歩き始めて間もなく全く問題のない状態になった。しかしホテルに泊まればこういう苦勞はしなくて済む。ホテルの宿泊費はアルベルゲのその5～10倍であるがそれだけの価値があるということである。

さてシャワーと洗濯と寝床作りがすんでほっとしたので談話室でティータイムを、と思ったが疲れているせいでクラッカーもミルクティーも胃に入らない。もっと時間がたったら落ち着くだろうと考え、七時ごろまでベッドでやすんでからキッチンに行き、日本から持参のアルファ米の松茸ごはんをサラミソーセージのおかずで食べた。

隣のテーブルでは韓国人グループがちゃんと調理したお食事を楽しんでいた。別のテーブルでは欧米人のカップルがお茶をしていた。おそらく彼らは私の食事の様子を見て、あの日本人はみすばらしいものを食べているな、よくあれだけで足りるな、と思っていたことだろう。言い忘れたがこの日同じ宿の同じ部屋に前の晩一緒にディナーを食べたデボラもいたのがわかった。が、そのあと会わなかったからきっと夕食は外に食べに行ったのだろう。

その日はウテルガまでを予定していたが途中でやめてしまった。やはり無茶な予定だった。ウテルガまではまだ12～13kmもある。明日はヴィジャトウエルタまで行く予定だったがここからだとも39kmもある。距離的に妥当なのはプエンテ・ラ・レイナだがそこに泊るのは何だか嫌だ。マニェルーにしようかな。それでもちょっときついな？

そして明後日にヴィジャトウエルタに泊るとするとういうことになる。

5月2日（水）シズール・メノール→プエンテ・ラ・レイナ

5月3日（木）プエンテ・ラ・レイナ→ヴィジャトウエルタ

5月4日（金）ヴィジャトウエルタ→エステージャ

そしてエステージャからバスかタクシーでログローニョへ。

5月2日（水）

シズール・メノールを七時に出発。なだらかな峠をペルドン峠に向かって登って行く。ペルドン峠（に続く山並み）の稜線を縁取る風車の群れがずっと見えている。ここから10km近くもあるなんてとても思えない。私より早く出発した人はいなかったようだが四十分くらいたつと足の速い人たちが次々と追いついてきた。

なだらかな上り坂が続く、続く・・・峠はだんだん近くなってくるようには見えるのだが・・・あれ？まだなの？・・・まだなの？不思議だなあ、こんな長い道、どこに畳み隠してあったんだろう？という感じ。そしてもう大分登ったような気がしたが実はまだ六合目ほどの位置だろうか、脇道にちょっと入ったところにけっこう大きな美しい池があった。前回は全く気がつかなかった。



神秘的で美しい池だった。



サリキエギより後。もうすぐペルドン峠。

そして六合目くらいの地点にサリキエギという村がある。村と言ったってバールもありアルベルゲも幾つかあるようで、ここに泊ってもいいかなと思うような村だ。小さな村でもスペインの、人が住んでいるところは美しい。私は後に気が付いたのだがスペインではマドリッドのような大都会でもサリキエギのような山の上の小さな村でも建物や道路のサイズ、広さやインフラの規模が違うだけで人々の生活の質は変わらない、と。日本では大都市の中心と地方の寒村とではまるで別世界で生活が違いすぎる。けれどもスペインでは都会でも田舎でも人々の雰囲気と同じように見える。日本だって大都会と地方の小さな村との違いは発展途上国におけるそれのようにどうしようもないものではないが、何だろう、僻地にいる人は不便だ不便だ、って思っているところが多いように感じる。娯楽が少ない、子供の教育が行き届かない、医療機関が遠い、車がないと買い物にも不便、若い人が少ない・・・等々。そうだ、まず服装が違う。都会ではお洒落をした人がたくさん歩いている。交通の便も良い。しかし私がそう感じるだけかもしれないが、スペインの田舎の人たちはそんなことをあまり気にしていないように見えるのだ。



サリキエギのバールの店の外のテーブル

さてそのサリキエギのバールで一休みをする。9:05～9:20。ハムとチーズのトルティージャとオレンジジュースを頼んだ。この店は三十代くらいの女性とその母親らしいお婆さんが切り盛りしていてジュースは瓶入りのを開けてコップに注いでくれた。トルティージャはケースから皿に取り出したものをお婆さんが電子レンジに運んでチンしてきてくれた。

私は前回「スペインに於いてはオレンジジュースはどこでもその場で搾りたて。どこのバールにもオレンジ搾り機が置いてありいつでもどこでも美味しいジュースが飲める」と書いたが訂正しなくてはならない。どうやらスペインのバールといえども搾りたてのジュースを飲めるのは店をやっているのが逞しい男性で他に一人くらいアシスタントもいるようなところだけだ。女性が一人か二人だけでやっているような店では搾りたてジュースを出すのは荷が重いのだろう。大概瓶入りジュースですませていた。

さて再びのペルドン峠、なんとなくとても好きな場所である。今回もやはり写真は撮らなくてはならない。人に頼んで銅板のモニュメントを背景に写真を撮ってもらう。昔の巡礼者たちの姿をシルエットのようにして並べたものだ。板は赤く錆びている。でもそこに滞在したのは九時四十五分から十分くらいの間である。すぐに反対側に下山する。



再びのペルドン峠



このさび付いた銅板にもいうに言われぬ風情が・・・

反対側は石ゴロゴロの急坂である。慎重に下る。以前読んだある本の中にこの坂を下る際ある年配の女性が転んでしまいゴロゴロと転げ落ちていった、と書いてあったことをどうしても思い出してしまう。でもいくらなんでも「ゴロゴロと」はないだろう。ズデン！と尻もちをつく危険はいくらでもあるが身体はそこで止まるはずだ。「ゴロゴロと」とは大袈裟な・・・と思っていたら私はズデン！と尻もちをついてしまった。やっちまった！とあたりを見回す。大分上の方に次の人たちが下りてくるのが見えるが多分気づかれなかつただろう。急いで立ち上がり再び慎重に下山を続ける。ケガはしていないようであった。



ペルドン峠の向こう側を下りきるとこのような緑滴る麦畑。本当はもっと濃い輝く緑だった。



ウテルガの村の入り口



ウテルガの村役場。旗は小さすぎて映っていない。(涙)

ウテルガの町に11:35に着く。小さいが綺麗な町である。いや、これは町ではなくて村というべきかな、やっぱり。どこの町や村にもあるのだが美しい旗を何本か立てた美しい建物の役場がある。旗はよくわからないが国旗と県旗と町旗だろうか。(旗をアップで写しておけばよかったですね。すみません。)一枚写真をとっておく。スペインでは(フランスやイタリアやドイツなどもそうかもしれないが)どこの町や村にも必ず綺麗な役場と教会と多分小さくても小学校とパールのような飲食店がある。宿も一つくらいあるのが普通だがよほど小さい村だとなないこともある。が、それ以外の店はあるとは限らない。薬屋は町な

らばあることが多い。薬屋がある規模なのが町で、それより小さい自治体が村、といってもいいような感じがする。まあこれは私個人の感想であるが。

少し行くとバールがあったのでカフェ・コン・レチェだけを頼むがカップに手がぶつかって中身を少しテーブルの上にまでこぼしてしまった。バールのセニョーラが忙しそうだったので布巾とか紙ナプキンとかを頼みに行くのも気が引けて、こぼれたものは自分のハンカチで拭き、後でバーニョ（トイレ）に行行って洗ってくる。11:55、また歩き出す。

そのあと暫く車道を歩いたがどうやらどこかで間違えたみたいで後ろから人の来る気配が全くなかった。でも方角は間違っていないと思ったのでそのまま歩き続けるとやがてオバノスの町に着く。13:00であった。

次の町はプエンテ・ラ・レイナである。これは「王妃の橋」という意味である。この名の有名な橋は二年前に来た時にも確認したはずであるがほとんど記憶していなかった。改めて見て「ああ、見たことがある気がする」と思った程度である。以前にも言ったように、心に余裕がなかったのだ。そのかわりにプエンテ・ラ・レイナで強く印象にのこっていたのがアルベルゲのこと。町に入ってすぐに木立に囲まれたちょっと良さそうなアルベルゲがあり、泊まりますか？とあたってみた。「アルベルゲ・ジャック」という名前だった。しかし「予約がないとダメ」と断られた。そういうことは他でもあったのだがそのアルベルゲについてだけ特に恨みがましく記憶しているのは、応対してくれたその三十代くらいの男性が他の人たちよりもほんのちょっと不愛想だったせいであろうか？でも別に失礼なことを言われたわけでもない。多分そこは前回の旅に於いて予約がないことを理由に断られた初めてのアルベルゲだったからだろう。アルベルゲの中には予約の必要などもあることを知ってはいたが基本は先着順と思っていたからまだ免疫ができていなかったのだろう。

そして私はそのすぐ先にある公営のアルベルゲに泊ったのであった。そこは収容人数も多くもちろん予約は不要。値段も5€と安かった。キッチンの設備もあった。しかし人が多すぎて落ち着かなかった。シャワーを使う気にもならず靴下だけ洗ってそれで手や顔を拭いた。前の町のパンプローナでスニーカーを日本に送り返してしまったのでホテルで貰ったペタンコのスリッパを履いてスーパーに買い物にも行った。しかしそのペタンコスリッパは濡れた床では滑りやすく大変危なかった。アルベルゲのキッチンやトイレの床は使った人がビシャビシャ水を飛ばしたままにしていることが多いのである。



このトンネルの向こうが橋



橋の上からの風景



前回宿泊を断られたアルベルゲ・ジャック



前回泊まった公営アルベルゲ

そんなこんなで私は自分の中にプエンテ・ラ・レイナの町に対するいわれなき悪印象を形成してしまったのである。だから私はプエンテ・ラ・レイナに泊るのはどうしても嫌で、ただ「アルベルゲ・ジャック」と公営アルベルゲの写真を記念に（恨みがましく）撮影しただけで冷たくスルーした。幸いまだ13:40である。次の町まで何とか行けるだろう。



プエンテ・ラ・レイナはパスしてマニェルーまで歩く

が、次の町まではけっこう長かった。15:30にマニェルーという町に着いたがその少し手前で欧米人のカップルに話しかけられる。「マニェルーに泊るか？」と尋ねられ「もちろん泊る」と答える。けっこう疲れたのでこれ以上先に行こうとは思わない。そしてできるだけ遅れないように彼らについて行く。道に迷うと困るからではなくて何となく人と一緒の方が宿がとりやすい気がしたから。そしてやがてアルベルゲらしきところに着きその店の前でそのカップルがオスピタレイロらしき人と話をしている。しかし彼らはちょっと話をして「そうですか。じゃあ・・・」みたいな感じでその店を後にして別の方向に進んでいく。

満員なのか、と私は思い、次をあたるのだなと考えて彼らについて行く。しかし少し行っ

てから彼らが怪訝そうな様子で私を見る。

「さっきのアルベルゲが満員だったのでは？」

と私が言うと、

「そうではない。」

と言ったようだった。彼らは私の勘違いを知り、私を伴って先ほどのアルベルゲに戻ってくる。そこは別に満員ではなく問題なく泊まれるようだった。そして彼らは別のところを予約していたのか先に進んで行った。私は何だか子供みたいな行動をしてしまったことが恥ずかしかった。

そのアルベルゲには大変愛想が良くて親切なオスピタレイラの女性（多分四十代くらい）がいた。それから玄関脇にあるバーを取り仕切っているらしい男性がいた。二人の関係はわからない。夫婦ではなさそうに見えた。そこで働いている人は他にもいたかもしれない。そしてここは泊るのに10€、ディナーを頼むとさらに10€だった。私は前夜の食事がかかなり侘しかったのでディナーを頼むことにした。

部屋に案内される。二段ベッドの並ぶ十人か十二人用くらいの部屋でベッドは生憎上段しか空いていなかった。誰でも下段を好むので下段から埋まっていくのである。「え〜、」と思ったが仕方がない。ザックは下に置き必要な物だけ出してベッドの上に放り投げてから自分も昇ってみるがとても苦労した。ロッククライミングをやるくらい大変だった。これはたまたま、何か踏み台にできる椅子でもないかとあたりを見回してみても部屋の中に一つだけある椅子は誰かがスマホの充電のために使っている。そういうものなのである。私の踏み台専用にするわけにはいかない。

それにしてもベッドの梯子は細いパイプ製で足場として不安定であり、上段部分の手すりは（あるだけマシかもしれない。上段なのに手すりが無いこともある）グラグラでとても掴まって体重を預ける気にはならない。それで私はさっきのオスピタレイラさんに頼みに行った。ベッドの昇降がとても大変なので何か踏み台になるものを貸してほしいと。すると彼女は「それならノープロブレム」と言って別の部屋に案内してくれた。その部屋にはまだ下段の空いているベッドがあった。なあんだ、初めからそうしてくれればいいのに！

落ち着いたところでバーに出かけ、「何か飲むものを」と注文する。「ジュース？ オレンジがいい？ パインがいい？」と聞かれ、パインジュースにしてみた。1・5€だった。

ところでちょっと不思議な体験をした。といってもそれは私の頭の中で起こったことである。その日マニエールまで歩いている間に私の頭の中いつのまにかある奇妙な記憶が「生じた」。そんな記憶となる出来事などなかったはずなのに、である。

どういう「記憶」かというと、「テレビで見て知ったこと」みたいな感じなのだが誰かが人形芝居のようなあるパフォーマンスをやって、それを鑑賞した観客がとても感動した、というものである。小さい子供ほどその話に感動して涙を流した、というのである。でも私はその「感動的な」ストーリーについては殆ど記憶がない。忘れてしまったのか？

しかしその映像がかなりはっきり「記憶」されているのだ。モチーフはおとぎ話の「舌切

り雀」に出てくるスズメの女の子である。赤い綺麗な着物を着ている。七五三の振袖にあるような柄の着物である。それを着たスズメの顔がデフォルメされて大きな目でこちらを見ているような形、そして赤い着物の部分がうまくバッグのような形に纏められて四角いポシェットの形状となっている。丸いスズメの顔はポシェットのポケットになっている。そのポシェット型のスズメが人形のような役目でパフォーマンスに役立ったらしい。らしい、というのは変だがそういう映像がまるでこんな夢を見た、とでもいうように私の頭の中に「記憶」として浮かんでいたのだ。



何だ、これは？と気づいたのはベッドで休んでいる時だった。決して眠っていたわけではなく、そういえばそこに着く前に歩いていた時も何となくその映像が頭の中で揺れていてそのことを別に変だとは思っていなかった。変だ、と気が付いたのがベッドの上でのことだったのである。私が積極的に考えたことでも思いついたことでもないのに何でこんなことを「覚えて」いるのだろうか？奇妙だが珍しい体験のような気がしたので忘れないようにメモしておいた。（それから大分時がたってからこれを書いている。そして今思いついたことなのだがもしかしたらあれは前の晩に見た夢を朝には忘れていてそれが夕方になってから蘇ってきたということだろうか？私は普段夢を見てもちょっとたつと忘れてしまうのでよくわからないのだが、そういうこともあるのだろうか？）

さて部屋替えをした先には二段ベッドが二台あった。私が陣取ったのとは違うベッドの下段に女性がすでに一人入っていた。しかし女性専用ルームというわけではなく後から男性客が二人来てそれぞれ空いていた上段に入りベッドは皆埋まった。女性はスロベニアから来たアナスタジアという名の人だった。「アナスタシア」ではなく「アナスタジア」と聞こえた。そのように発音するのかもしれない。

ディナーは七時から大きなダイニングルームでいただいた。私の右隣にアナスタジアが座った。あまり口数が多いほうではなく物静かな感じだった。英語は堪能だが母国語ではないのでそんな感じになるのかもしれない。そして逆に私の左隣に座ったスリムで長身な若い女性は水原希子にそっくりな風貌で賑やかによく喋る子だった。名前は聞いていない。ど

この国の人かも聞かなかった。滑らかに話ができない私など眼中にない様子だったから。

私の正面にドイツ人の男性がいて彼から見てその右側に確かイングランドからという女性がいた。落ち着いた雰囲気四十歳前後と見られる美しい人だった。名前は聞いたかもしれないが覚えていない。長いテーブルに全部で二十人近い人がついていたようであったが私が話したのはアナスタジアとそのドイツ人とイングランド人だけである。しかしここでは写真は撮らなかった。「写真を写してもいいか？」と尋ねるような雰囲気にならなかったのだ。あまり大勢の中にいると私のアウェイ感はかなり上昇する。会話力が相対的に下がるのである。

さて食事はどのようなものであったかという、前菜はパスタか豆のスープかエンサラードミクスタ（ミックスサラダ）かということで私はパスタにした。パスタはマカロニが出てくることが多いが味に当たりはずれはないと感じていた。エンサラードミクスタは実はとても食べたいのだが以前にとっても塩が利きすぎていて食べられなかったことがあるので警戒してやめておいた。しかし多くの人々がそれを選んでいて。

ララソアーニャでのディナーの後私は確信していた。スペインではしばしば料理に塩を使いすぎる。塩味が大好きというよりきっと「適量はこのくらい」という基準がないのだ。悪く言うとニブいのだ。甘みについてもそうだ。時々デザートは甘みが強すぎて閉口することがある。

それからもう一つ思い出すことがあった。カミーノをする韓国人は少なくないが彼らはアルベルゲのキッチンで料理をすることは多いがこのようはディナーの席でその姿を見たことがない。それは彼らが食事というものや自国の料理を大切にしているからだろうと思っていたのだがもう一つ理由があることに気が付いた。彼らの多くはスペイン料理に馴染めないのだ。

スペイン料理は一般的に韓国のそれに比べると単純であり時々塩気がとても多い。私は韓国人の先生に韓国語を習ったがその先生は「日本の食べ物は塩分が多い」と言っていた。また私がスペインで食べたものを写した写真を見て「これだけ？つまらない。」と言った。日本人は塩味の加減や甘みに対してデリケートだと思うのだがその日本の食物に対してさえ「塩辛過ぎる」という人たちである。スペインの塩味の強さを受け付けられるわけがない。それに彼らは多種の料理を大勢でつづくことを好むようだ。

さてその時多くの人々が選んだエンサラードミクスタ、それはとても美味しそうだった。どうやらまだ塩はかけられていなかったようである。各自テーブルの上の塩、コショウ、オリーブオイル、ビネガーを用いて調味していた。しかし私は新たに驚かされた。欧米人の人々は塩やオイルをドバドバとかける！本当にドバドバである。オイオイ、そんなにかけて大丈夫か？！と止めたくなるくらいである。オリーブオイルなどテーブル上の瓶（200 ml か 250 ml に入ったものが一人か二人の使用で空になり、追加が届けられるくらいであった。アンビリバボーな光景であった。

でも私もエンサラードの方にはすればよかった、と後悔した。私の選んだパスタはマカロニ

のゆで方が足りずアルデンテ状態で味は薄かった。塩をかければ済む状態ではなかった。味が薄いよ～ソースが足りない！と叫びたいくらいであった。パスタが外れることもあるんだなと思った。

メインは肉を頼んだらチキンの胸肉を堅く焼いたものが出てきた。これはよく出るものであり驚かなかったが味が物足りなかった。誰かがケチャップをオーダーし、届いたものを私も使ってみたがこれがなかなか強烈な味だった。う～ん、何だろう？塩分も酸味も強くてスパイシー？それで少ししか使えなかった。

しかし味よりもマズいことが発生した。その堅い鶏肉のせいで私の歯が一本折れてしまったのである。もともと古くなって弱っていたのだろうが・・・過去に治療したことのある歯である。私はガッカリしてもう頑張って周囲と会話をする気がなくなってしまった。

デザートはヨーグルトだった。イチゴソースが甘すぎる感じだったがまあ食べられた。ところで肉ではなく魚を選んだアナスタジアのところには茶色く揚げた小魚のフライが来た。何の魚かわからなかった。彼女はそれを全部は食べなかった。しょっぱかったのだろうか？

【 下の部に続く 】